社会知性の開発をめざす 専修大学

ニュース専修 ウェブ版

2007年6月号

[1面]

生田キャンパス「130年記念館」完成記念

“海のシルクロード”シンポ開催

海域世界における「港市」のあり方考察

生田キャンパス130年記念館10号館の完成を記念する公開シンポジウム「波涛(はとう)こえてシルクロード」が6月2日、同館で行われ、6講師の講演を400人が聴講した。

日高義博学長、矢野建一実行委員長のあいさつのあと亀井明徳教授の司会で進行。

▲あいさつする日高学長

ユーラシア大陸東西の交易、文化交流を支えたシルクロードは「草原」「オアシス」「海」の三つの道からなる。本シンポジウムでは東・南シナ海—インド洋—アラビア海—紅海—地中海を結ぶ「海の道(シルクロード)」に焦点を当てた。異なる自然生態系と文化価値を持った「インド洋海域世界」と「地中海世界」がどんな歴史を歩みながら交流していったのか、13～16世紀の全盛期を中心に探った。

▲矢野実行委員長(右端)と講師のみなさん

家島彦一氏は「海洋交流により海に張り巡らされた『港市ネットワーク』は、従来の陸の領域国家を中心とした歴史観や国家のあり方を問い直し、グローバル化が進む未来型社会を考える手がかりになるのではないか」と語り、海のシルクロードがもたらした今日的意味を説いた。

▲会場の10301教室で講演する亀井教授(円内も)

「シナイ半島」「東地中海」など6講師のテーマ

▽家島彦一早稲田大学教育・総合科学学術院教授「海洋交流からみたダイナミック・アジア史—海のシルクロード再発見」▽四日市康博九州大学大学院人文科学研究院講師「モンゴル帝国・元朝期の東西交流—漠北と南海」▽川床睦夫イスラーム考古学調査隊・隊長「シナイ半島、紅海の港湾遺跡の調査」▽鈴木董東京大学東洋文化研究所教授(本学非常勤講師)「東西交通の海陸の大動脈とオスマン帝国」▽堀井優広島修道大学准教授「東地中海世界のヨーロッパ商人」▽亀井明徳本学文学部教授「大海域世界をつなぐ14世紀の中国陶瓷(とうじ)」

Copyright(C) 2007 SENSHU UNIVERSITY All Rights Reserved.

社会知性の開発をめざす 専修大学

ニュース専修 ウェブ版

2007年6月号

[1面]

東アジア世界史研究センター「古代東アジア世界史と留学生」

オープンリサーチセンター整備事業に採択

▲大きな反響を呼んだ2005年1月のシンポジウム「新発見 遣唐使の墓誌をめぐって」

平成19年度私立大学学術研究高度化推進事業（オープン・リサーチ・センター整備事業）に社会知性開発研究センター／東アジア世界史研究センターが申請していた、「古代東アジア世界史と留学生」（研究代表者・荒木敏夫大学院文学研究科教授）が選定された。本学からの選定は5件目となる。

本プロジェクトは、古代東アジア世界を流動した人々との対比を視野に入れた上で、東アジアの国々が、さまざまな文化・文物の流入を期待し、それを直接に担った「留学生」に焦点を絞り、テーマを設定していることが特徴としてあげられる。

先進文明国に位置する中国への留学生は、文化・文物を「移植」「媒介」した存在であるが、その果たした歴史的な意義は、十分に明らかにされていない。

本プロジェクトは、本学大学院が発見に大きな役割を果たした、「遣唐使井真成墓誌」で培われた中国西北大学大学院との共同研究を基礎として、秦・漢代から隋・唐代の中国への東アジアからの留学生の全貌を明らかにしたうえで、古代の東アジアの国々への影響を解明するもの。

また、東アジア世界の若手研究者の育成を目的の一つとしていることも特徴としてあげられる。

Copyright(C) 2007 SENSHU UNIVERSITY All Rights Reserved.

社会知性の開発をめざす 専修大学

ニュース専修 ウェブ版

2007年6月号

[1面]

グアテマラ代表団、本学などで研修

平和で尊厳のある暮らし目指す

学生との報告・交流会も

▲グアテマラ再生のポイントを語る狐崎教授

「戦禍から復興、発展を遂げ、平和国家を作り上げた日本の姿を国に持ち帰りたい」。長期間にわたる内戦があった中米グアテマラから、市長など地方行政や市民社会のリーダーが来日。生田キャンパスを訪問し、専大生に平和と人権確立への思いを伝えた。

▲学生達と一体となって報告会

一行は、イシュチグアン市長のヘロニモ・ドミンゴ・ナバロ・チレルさんやDEMI（先住民女性擁護庁）長官のマリア・テレサ・サペタ・メンドーサさんら9人。3月28日から32日間、国際協力機構（JICA）が本学に委託した特別研修に参加、日本の経済発展、農村開発、平和構築への取り組みを学んだ。一昨年秋にもほかのメンバーの代表団による特別研修が本学などで行われ、今回は2回目となる。

本学の学生との報告会・交流会は、4月20日に開かれた。多言語多文化国家であるグアテマラは、36年間にわたる内戦が終結してから11年になる。この間20万人が虐殺の犠牲となった。戦後も不安定な政治情勢や腐敗、貧富の差、土地の所有権、先住民における女性差別など課題は多く、復興への道は険しい。

▲交流会ではグアテマラの伝統的なダンスを披露（生田・CABINで）

同国の民主化定着プロジェクトを推し進めている狐崎知己経済学部教授は報告会で「研修者の皆さんは、地域社会で活躍する人望の厚い人ばかり。グアテマラでは地方からの再生が国造りのポイントになる」と語った。

マリア・テレサさんとPDH（人権擁護官事務所）県代表のサトゥルニーノ・フィゲロア・ペレスさんが同国の現状を報告。先住民ネオリベラルとして内戦を戦い抜き現在、国会議員選挙出馬を予定しているサトゥルニーノさんは「尊厳のある暮らしを実現させたい」と真の民主化実現への意気込みを学生80人を前に語り、多くの質問が寄せられた。

期間中、狐崎教授をはじめ経済学部の原田博夫・徳田賢二両教授、飯沼健子・泉留維両准教授が講義を担当。「人間の安全保障と貧困削減」「地方行政」「女性と開発」など研修者の要望に応える内容だった。

地方研修も活発だった。有機自然農法（群馬県富岡市）、中南米原産の雑穀アマランサスの生産と商品化を成功させた農家や女性経営者企業（岩手県）、地域の資源や人材を活用し注目される「道の駅・君田」（広島県三次市）など地域開発の成功例を視察。地場産業のあり方や女性が働く意義を実感する研修となった。

DEMI理事のイサベル・フランシスコ・エスタバン・デ・フアレスさんは「信頼関係の大切さを強く感じた。改革とは私自身が変わることであると思った」。大統領人権コミッショナー・ソロラ県コーディネーターのサルバドール・コチェ・ダミアンさんは「平和構築へのプロモーターとして日本の成功例を若者に伝えたい」と、共に研修成果の大きさを語った。

同27日、東京渋谷区のJICA東京で行われた評価会・修了式では、研修の多くを担当し、研修生の支えとなった狐崎教授と本学の協力に、感謝の言葉が相次いだ。

Copyright(C) 2007 SENSHU UNIVERSITY All Rights Reserved.